

私のおすすめの本

桑山啓子 専任講師
(英語)

『完訳 アーサー王物語 (上・下)』サー・トマス・マロリー著 中島邦男[ほか]訳

青山社 1995年

アーサー王の話をもとにした本や映像は数多く出ている。子供向けのものとしてはディズニーの「王様の剣」が有名だし、R.L. グリーンの「アーサー王物語」(岩波少年文庫)やブルフィンチの「アーサー王物語」(角川文庫)も有名である。またアーサー王の話を下地に多くの作家たちが物語を書いている。

「アーサー王物語」の実際のモデルとなったのはブリトン人の王(部族長?)だと言われていて、その活躍が伝説化され一度ヨーロッパに輸出された。ヨーロッパで人気が高かった「アーサー王伝説」が逆輸入された形となってイングランドでもいろいろな作品が作られる。中でもサー・トマス・マロリーの「アーサーの死(Le Mort D'Arthur)」が「アーサー王物語」を集大成した形となっている。

この本はキャクストン版ではなく、ウィンチェスター版を訳したものである。長い間キャクストンが印刷したキャクストン版がマロリーの原稿に近いとされ、しかもアーサー王の誕生から死までの1つの話として扱われてきた。しかし偶然ウィンチェスターの僧院の書庫から見つけられた原稿をオックスフォード大学のヴィナバー教授によって我々が読める形となった。そこで分かったことはマロリーがアーサー王の話をもとに1つの物語として書いたのではなく、8つの別の物語を書いたのだということだ。その話の中には有名な「サー・ガーウェンと緑の騎士」「トリスタンとイゾルデ」の話、そして聖杯の探求の話が入っている。何よりも最後の話「報いなき世にも痛ましきアーサーの死の物語」では王妃グウィネヴィアのせいで円卓の騎士の関係が崩れ、更には不義の息子モードレッドと相打ちになり深手を負ってアヴァロンに旅立っていく話は涙なくしては読めない。

現在このコロナのせいで人間関係が希薄になってしまったように思える。この物語を楽しみながら、人が人としてあるべき姿を考え直してみるのもいいかもしれない。

(「アーサー王物語」の話の内容やマロリー等に関する説明はこの本の下巻巻末の訳者の説明を参考にさせていただいた。)

『十二夜』 ウィリアム・シェイクスピア著 小田島雄志訳

白水社 1983年

「十二夜」は「ロミオとジュリエット」、「ハムレット」などと比べてあまり人気がないのか、映像の作品も少ないような気がするし、舞台化されることも少ないような気がする。

この話は双子の兄妹はお互いが嵐で死んでしまったと思いこみ、妹は男装してその土地の公爵に小姓として使え、兄は別の船の船長に助けられて、その人と一緒に妹がいる街にやってくる。ヴァイオラが男装して公爵に仕えたことから、公爵、公爵が思いを寄せる伯爵の娘オリヴィア、ヴァイオラの双子の兄セバスチャン、そして当人のヴァイオラの間で混乱が生じ、恋の大騒動が起きる。最後は問題が解決して2組のカップルが出来てめでたし、めでたしとなる。

シェイクスピアの素晴らしいところは人間を大きな目で見て表現しているところだと思う。人間のどうしようもない欠点を道化や道化的名役割を担う人物に笑い飛ばさせたり、また当人の真に迫る独白で言わせたり、本を読んでも映像を見てもすごいと思うのである。

小田島氏の訳は大変読みやすく、しかもシェイクスピアの作品の持ち味を崩さず、面白いセリフは本当に面白く、また真剣な場面では当人と一緒に真剣に悩んでしまうように訳してある。ぜひ、この本を読んで楽しんでもらいたいと思います。

『高慢と偏見』 ジェイン・オースティン著 阿部知二訳

河出書房新社 1996年

この小説は18世紀イギリスの田舎を舞台にジェントルマン階級のベネット家の人々が織りなす喜劇的な恋物語である。ベネット家の場合、財産は男子が相続することになっていたため母親のベネット夫人は自分の娘たちを少しでもいいところに嫁がせようと必死である。ベネット家の隣の大屋敷にロンドンからビングリー氏が来ると聞くや自分の主人にあいさつに行き、舞踏会に招待してもらえる手はずを整えてほしいと言うがベネット氏は取り合わない。とは言え、こっそりと出かけていき手はずを整えていたので、娘たちはビングリー氏主催の舞踏会に出席できたのである。ビングリー氏は長女のジェインに恋をするのである。ビングリー氏の友人のダーシーはプライドが高すぎて鼻持ちならない人物である。思い込みの激しい次女のエリザベスはダーシーのプライドの高さのためにダーシーのことを嫌ってしまう。最初はプライドが高く、どうしようもないと思えたダーシーがエリザベスに対する恋心で変わっていくのである。原作ではこの変化を楽しむと同時に作者のオースティン

ンの辛口でウィットのきいた意見を話の合間に読んで楽しむことが出来る。

この作品は「ブリジット・ジョーンズの日記」の基になった。「高慢と偏見」を BBC がドラマ化してダーシー役はコリン・ファースであった。コリン・ファースはこの作品のダーシーのイメージが強すぎて 10 年ほど中々仕事がうまくいかなかったそうである。ようやくダーシーのイメージが取れて何とか軌道に乗ったところで再びダーシー役。この二つの作品を映像で見るとともに、秋の夜長をこの原作を読みながらオースティンの世間に対する辛口の見方を楽しむことをお勧めしたい。

著者自己紹介

桑山 啓子（くわやま けいこ）

日本大学文理学部文学研究科博士前期課程修了

専門：英語学（英語史）特に 15 世紀の作品の英文の文体を文法的に研究。

「アーサー王物語」、「源氏物語」を始めとして和洋問わず古いものが好きである。